

研究報告：秋田大学保健学専攻紀要21(2)：131 - 137, 2013

秋田県美郷町の湧水に対する住民の意識調査 フォーカスグループインタビューの手法を用いて

湯 浅 孝 男 高 橋 恵 一 久 米 裕
石 川 隆 志

要 旨

湧水に対する住民の意識を調べて湧水の今後の利用のあり方を検討することを目的とした。対象は美郷町に在住か、もしくは美郷町に職場がある人20名（男9名，女11名）で平均年齢は 43.6 ± 9.4 歳。職業は会社勤務が12名，公務員が7名，パート勤務が1名だった。対象者を3つのグループに分けてフォーカスグループインタビューを行った。その結果，水道・電気の普及により清水の利用形態が変化し，生活用水として清水が使用されなくなるにつれて住民の清水に対する意識が低下してきているが子どもの水に対する安全教育や地域の環境を守る教育の必要性を感じる大人達の自主的な活動が一部では行われ，大人の関わりが子どもの水への関心や親しみ感を育てていた。清水の観光利用に際しては六郷地区の多様な清水の形態に応じた対応が必要であることが示唆された。

はじめに

ストレス社会といわれる現代において自然が人間を心身共に癒やすことは科学的にも証明されつつある¹⁾。美郷町には126カ所の清水があり，中でも六郷湧水群は「名水百選」に選定されるなど，清水の郷として知られている。清水とは岩の間などから湧き出る澄んだ湧水のことであるが，六郷地区では清水周辺の木々や水路も含めた環境が癒しの空間を形成している。しかし生活スタイルの変化により昔から日本の各地にあり人々の生活と深く関わってきた湧水や水路などの水資源はその存在価値が失われつつある²⁾。清水の存在価値が変化している現代においては，地域にある水資源の魅力と環境を守るための問題をより多くの人々に伝えて課題を共有する必要があると考える。そこで，今回は対象地域を水資源に恵まれた美郷町とし，地域の人々が普段感じている水資源の魅力の伝え方，水環境を守る上での問題点，そして清水との関わり方についての考えを「意識」と定義し，町民対象の意識調査を

行い，今後の清水の利用のあり方について検討するためのヒントを得ることを目的に調査研究を行った。

対象と方法

1. 対象者

秋田県美郷町に在住か，もしくは美郷町に職場がある人を保健師が職場の長を通じて依頼した。参加人数は20名（男9名，女11名）で平均年齢は 43.6 ± 9.4 歳。職業は会社勤務が12名，公務員が7名，パート勤務が1名だった。7名を2グループ，6名を1グループの3グループに分けてフォーカスグループインタビューを行った。

2. 倫理的配慮

参加者には事前に書面で研究の目的と方法，そして個人情報保護について説明し書面で同意を得た。

秋田大学大学院医学系研究科 保健学専攻 作業療法学講座

Key Words: 湧水
フォーカスグループインタビュー
意識調査

3. 調査対象地域

調査対象地域である美郷町六郷地区は秋田県の横手盆地の東部に位置している。丸子川やその支流が形成する六郷扇状地に位置し、六郷扇状地の末端部には湧水帯があり、数多くの清水が湧き出して昔から集落が形成されている。六郷扇状地は地下水が豊富であり、そのため現在は各家庭や小集落では自前の揚水ポンプで地下水を汲み上げて利用している³⁾。

4. 調査方法

フォーカスグループインタビューは初期にはマーケティング研究者によって用いられていたものであるが、消費者の考えを知るには1対1のインタビューよりもフォーカスグループの方がより自然な意見を収集できるという利点があるため⁴⁾ケアの専門職でも用いられ

るようになってきていることから本研究ではフォーカスグループインタビューを利用した。フォーカスグループインタビューは外部からの影響を受けない個室で行われた。司会は筆頭筆者が行った。話し合いはICレコーダーに録音した。司会者はあらかじめ決めておいた以下のような話題を出して話し合いを促した。(1)清水での遊びの経験にはどのようなことがありましたか、(2)町の水の魅力を他の地域に知ってもらうためにはどうしたらいいですか、(3)清水周辺の整備などの問題にはどのような事を感じますか。話し合いは3グループとも約50分程度かかった。

5. 結果の整理方法

ICレコーダーの録音を元にした逐語的な発言記録をデータとした。3グループの逐語記録は一括して分

表1 住民の清水に対する意識のカテゴリー

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
昔と今の清水の存在価値の変化	1 生活用水と子どもの遊び環境が一体だった昔	1 昔は共同で水を守っていた 2 ほとぼしり出る昔の水遊びの楽しい思い出
	2 生活から遊離した現代の清水	3 電気・水道に頼る現代の生活 4 水の遊びを知らない子供達
生活から離れた清水がかかえる課題	3 清水から離れる住民意識	5 清水の恩恵を感じなければ清水への意識も遠のくのが自然 6 役所任せ他人任せの清水の清掃活動
	4 水環境の悪化	7 生き物や緑の減少 8 清水周囲の汚れと観光客の失望への不安
	5 学校教育の課題	9 学校の授業用の清水に子供が魅力を感じているかの疑問 10 水の危険を強調して水から子供を遠ざける現代の教育
清水を住民に取り戻す活動の現れ	6 芽生えるボランティアの力	11 ボランティアによる清水の清掃活動 12 子供会活動による清掃活動 13 子供と一緒に水の勉強会や遊びの実践
	7 活動に参加した大人の意識の変化	14 清掃活動の継続による湧水地の環境改善 15 清掃活動で綺麗になった湧水地は親にも魅力
	8 子供達の水への理解の深まり	16 大人との川遊びや清掃活動が子供が水の恵みや楽しさに気づききっかけに 17 大人との水遊びや勉強が家族の会話の機会になった 18 子供は大人と一緒に川遊びで、水の危険性と安全の併存の体験
住民の財産	9 現代にも続く清水の価値	19 涼しくて緑が豊かな湧水地のある誇り 20 夏冷たく冬暖かい水がほぼ無料で使えるありがたさ 21 災害時の非常用水に使える清水の存在 22 綺麗でおいしい六郷の水
	10 清水の観光利用	23 持続した適度な人の手と自然のバランスが人の心を引きつける 24 生活密着の清水と、生活臭のない清水の魅力の違いを認識する必要生 25 湧水とリンクした売り物の必要生

析の対象とした。逐語記録データ（テキスト）を意味のまとまりごとに区切り、テキストを表すようなテーマ・構成概念を記入したラベルを作成した。次に類似性と相違性に従ってラベルのグループ編成を行いカテゴリーを作成した。さらにカテゴリー同士を比較し関連づけて上位のカテゴリーを求めた。カテゴリー間の関係の構造を図でまとめてモデル化した。カテゴリー化とモデル化に際しては共同研究者と協議して行ったが最終的な判断は筆頭筆者が行った。

結果

フォーカスグループインタビューの結果は142のラベルに分割された。それらは25の小カテゴリー、更に10の中カテゴリー、そして4つの大カテゴリーにまとめられた（表1）。カテゴリー間の関係の構造を図1に示した。

以下にその内容を大カテゴリー順に述べる。具体的な発言の例をかぎ括弧で示した。

1. 昔と今の清水の存在価値の変化

1) 生活用水と子供の遊び環境が一体だった昔

生活用水として清水が使われていた時代には共同で水を守ってきた。その頃は清水の周辺は手入れが行き届いて綺麗だった。例えば「清水でご飯を洗って食べたり、夏には冷たい水でスイカを冷やしたり飲んだりした」、「学校から帰ってくると清水に集合して遊んだ」、「小さい頃でも安全に遊べる水辺を3つぐらい知っていて友達を連れて遊びに行った」というように、水が大人にとっては生活用水であり子どもにとっては遊びと直結していた。

2) 生活から遊離した現代の清水

現代では家庭が電化されて食品は冷蔵庫で冷やすし、暑ければ冷房をつけるので昔と今では生活が違ってしまった。そして水道が普及したので蛇口をひねれば冷たい水が出るので清水で物を冷やす必要がなくなった。その結果「当時と今の環境が全然違って、今は冷房もあるし水辺に行かなく

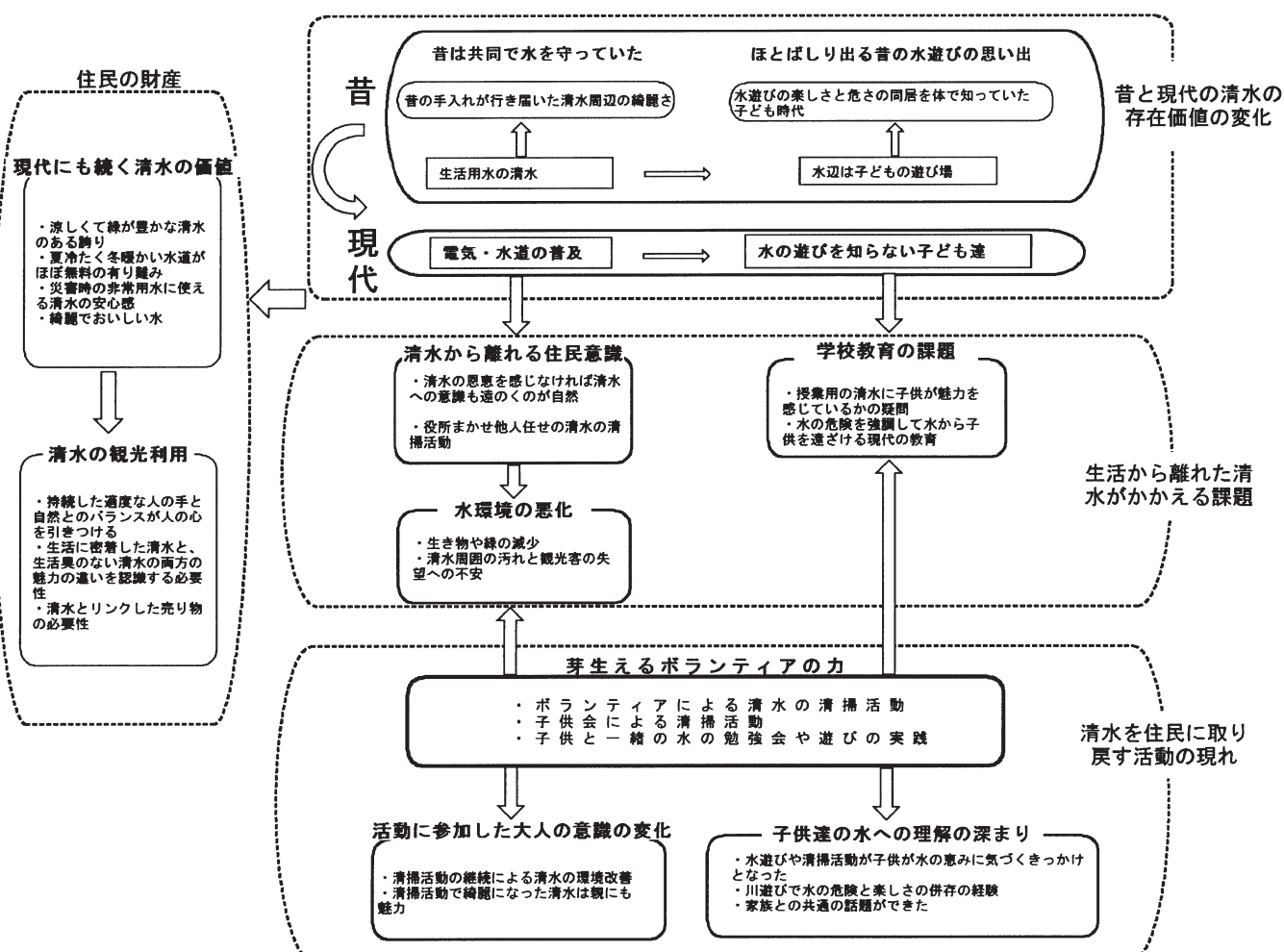


図1 住民の清水に対する意識

でも涼しいし、洗うには洗濯機があるし、昔はけっこう洗い物をしていましたけど。」と述べられているように清水が生活から遊離していった。その結果、清水に行くのは観光客で自分たちはあえて清水に行くこともなくなったと述べている。汚れて危ない清水には子どもには行けと言えないし、自然の中で遊ぶ経験を持たない子ども達は遊び方も知らないのかわいそうと親は見ている。

2. 生活から離れた清水が抱える課題

1) 清水から離れる住民意識

清水の恩恵を感じなければ清水への意識も遠のくのが自然な感情と受け止められていた。例えば「昔は生活に直結していたから自分たちで綺麗にしようというのがあったけど、今は蛇口をひねれば水は出てくるし、洗濯もしなくなったから足が遠のいて、そこに意識が向かないというのがあるのかもしれない。毎日使っていれば汚れていれば気になるものね。ちょっとやればいいのを、見ないから汚れがたまっていって。」と述べている。そして「以前は清掃活動は各集落でやって当たり前というのが、最近は汚くなってきたら役場に電話すればいいみたいな感じになってきている。」と述べ、役所任せ他人任せの清水の清掃活動となっていると感じていた。

2) 水環境の悪化

以前は清水の水は飲むのが当たり前だったのに、「今ではその清水に行って飲めと言われてもちょっと無理だな。」と汚れを実感し、水周辺の生き物や緑の減少が述べられていた。外部から来る人達からの「せつかくきれいな水が湧いているのに地元の人たちはありがたみがないのかしらね」という指摘を受け、清水周囲の汚れに対して観光客が失望することで観光資源が低下することに不安を感じていた。

3) 学校教育の課題

学校では子ども達を清水に授業として連れて行くが、はたして子ども達の心にどれくらい響いているのか疑問に感じていた。そして学校は水の危険な側面を強調して「川に入っちゃいけない、川で遊ぶのはいけません、水路には入っちゃいけないと教えているから、川は入っちゃ遊ばない、入っちゃいけない」と教えていると述べ、水の危険を強調して水から子どもを遠ざけてしまっている現代の教育の問題を指摘していた。

3. 清水を住民に取り戻す活動の現れ

1) 芽生えるボランティアの力

近くにある清水を子供会の活動として清掃する活動があり、綺麗になると子どもは水遊びをするようになった。綺麗にして危ない物を除くと親は子ども達に遊びに行かせられるようになった。子どもたちと水について勉強しようということで水質検査をしたり、蛍の成長を調べたり、川に入って水遊びをしようということで実際に川に連れて行く活動も出てきていた。

2) 大人の意識の変化

掃除をして綺麗になった清水周辺の環境の変化を体験した人は、そのように綺麗に安全になると自然に人が寄ってくるようになるし、子どもだけでなく大人にとっても清水が魅力になると話していた。そして水が綺麗で安全であれば家の中でゲームばかりしている子どもが自然相手の遊びを知ることができると考えていた。

3) 子ども達の水への理解の深まり

清掃活動で清水周辺が綺麗になったら「家の子どもなんかはちょくちょく見に行っているみたいです。親がちょっとしたヒントを与えることによって、普段歩いていて見向きもしなかった水路をちょっとのぞいてみるとかというような水に対する関心もでてきた」と述べ、親の活動が水に興味を持つきっかけとなっていた体験を話した。親がついて川で遊ばせる活動を行った人は「ああ川って意外と安全なんだとか、親たちがいうほど危ない所ではないんだ、確かにゴミとか危険なものはあるんだけど、ビーチサンダルを履いて入れればそんなに危なくない」と子どもが受け止め、危険を防ぎながら楽しむきっかけとなっていたと述べていた。そして川には入ったこともなかった子どもに水に入って生き物を捕らせると面白くて水からなかなか上がらなくなると述べ、「水は飲むものだし使うものだけど、入って遊ぶものでもあることが子どもたちもわかったのかなと思います」と大人の関わりが水に親しむきっかけとなっていたことを述べていた。

4. 住民の財産

1) 現代にも続く清水の価値

涼しくて緑が豊かな景観のある町、そして夏冷たく冬暖かい水を豊富に使えるありがたい水は水の豊かな町に対する誇りだった。震災により水道

が使えなくなっても綺麗な水がどこに行けば手に入るか知っている住民は、いざとなっても生活用水には困らないという安心感を持っており町の貴重な財産と受け止めていた。「こんもりとした木々があってその中に水がある」という自然の緑と水が一体となった環境が「落ち着く雰囲気」という癒やし感となっていた。

2) 清水の観光利用

ベンチなどの人工物を設置すると手を入れ続けなければならず中途半端に人の手を加えることの問題点が指摘され、人の手と自然とのバランスが清水環境を守る上で大切なことが指摘された。また、対象地域には生活に密着した生活用水として清水を利用することに特徴があるが、その他に自然の中に点在する清水もあり、両者の魅力の違いを認識する必要性が述べられていた。清水とリンクした売り物の開発は必要だが、清水を観光の中心に据えるためには湧水期の対策の必要性も述べられていた。

考 察

1. 緑と水が一体となった環境

今回の対象地域で湧水散策の生理・心理的効果を生理的指標と主観的指標を用いた研究⁹⁾では、湧水散策後に STAI (State Trait Anxiety Inventory) 状態・特性不安検査の状態不安尺度と POMS (Profile of Mood States) の混乱 (C) で有意な低下があり、湧水散策はストレスを減弱させ、心理的なりラックス効果をもたらすことが示唆された。また、清水そのものの効果ではないが森林浴効果を検証した研究では散策後に抑鬱、怒り・敵意、疲労と混乱の気分が有意に低減していた⁹⁾。本研究の参加者が緑と水の一体感が落ち着く雰囲気を感ぜさせると述べていたが、上記の2つの研究が示していた心理的なりラックス感や気分の変化を述べていたものと思われる。

2. 子どもの遊び環境としての清水

子どもは児童期になると遊びを通じて地域との関わりを持つ。地域では自然に遊び仲間が作られ異年齢の子どもが群れをなして遊ぶことがかつての農村社会では普通に見られた光景である。グループインタビュー参加者が子ども時代を振り返って異口同音に語っていたのは清水周辺に自然に子どもが集まり遊んだ体験だった。しかしテレビやファミコンゲームといった室内での一人遊びが広がるにつれ、農村地域の子どもの減少

と相まって地域からの子どもの孤立化は深刻になっている⁷⁾。子ども会活動の一環として清掃活動を行った体験を持つ人が、大人が清掃活動を行うと自然に子どもが清水周辺で遊びだし、ゲームとは違った遊び体験を持つことができると語っていたが、大人が地域に関わる姿が子どもに自然の遊びを体験させ地域再生のきっかけとなることを物語っていると思える。

3. 子どもの水遊びと安全性について

長谷川⁸⁾はプールで泳げる大学生が海では泳げないでパニックになるケースが毎年いることを報告し、人工的に管理された環境で泳げても自然環境下で流動変化する自然水には対応できないことから自然の中での体験学習の必要性を述べている。話し合いの参加者は昔は危ない場所と安全な場所を心得ていて、安全な場所に子どもが集まっていたと述べている。また、かつては清水も川も物を洗ったり冷やしたりという生活用水に使用されていたため大人の目が常にあり、また年上の子どもの監視の目があったため水周辺の遊び環境の安全性は今よりも高かったものと推測される。しかし現代では異年齢の子ども集団が形成されにくく、清水や川が生活に使用されなくなったことから地域の大人の目も行き届かなくなり自然の中の水遊びには大人の関わりが必要となっている。子どもに川遊びを体験させた人は危険の防ぎ方を教えると楽しさもわかると述べていたが、水の危険ばかりを強調して実際の体験を奪うことが危険から身を守る能力と楽しみを奪うことになりかねないことを示唆しているものと思える。水路における安全な水遊びを可能にする水辺の構造について角道⁹⁾は安全性を規定する要因として流水状況、水路構造、そして水の接しやすさというアプローチ手段や子どもを注視できる空間等も重要であると述べている。水と生活との関わりが昔と現代とは様変わりし、子ども集団が形成されにくくなった今では安全確保には大人の関わりが求められていると思える。

4. 清水の利用形態の変化による意識の変化

かつては飲用水や洗いに利用されてきた清水の利用形態が変化しているのは六郷地区だけではなく日本の他の地域でも見られる現象である。例えば横手市平鹿町で住民の湧水に対する意識の変化をアンケート調査した研究¹⁰⁾によると住民の湧水の利用形態が変化することで、湧水に対する関心が薄れ、意識が低下してきている。また同研究によるとかつては清水は農業用水や生活用水としての機能だけでなく住民が集う“場・空間”として機能してきた。しかしホームポンプの導入および共同水道の開始などの環境の変化は人々が湧

水に触れる機会の減少だけでなく住民が集う機会の減少となった。今回のインタビュー参加者は昔は清水周辺に子どもが自然に集合して遊んでいたことを懐かしい回想として語っていたが、現在は六郷地区でも清水が子どもが集う場として機能しなくなってきている。湧水を自然型、集落型、農地型、公園型の4つに類型化して住民の意識・行動を調査した研究⁹⁾によると利用頻度の高い湧水に対しては住民は親近感を持つ人が多いが集落から離れた所にある自然型清水や公園型の清水に対しては湧水に対して積極的な意識を持つ人が少なく行政サイドで清掃管理すべきと考えられていた。六郷地区の場合にも清水が生活用水として使われなくなり、また人が集う場・空間としての機能を果たせなくなり清水に対する住民の意識が薄れ結果的に清水周囲の汚れや水質の悪化という悪循環が生じていると思える。

まとめ

1. 水道・電気の普及により清水の利用形態が変化し、生活用水として清水が使用されなくなるにつれて住民の清水に対する意識が低下してきている。
2. 子どもの水に対する安全教育や地域の環境を守る教育の必要性を感じず大人達の自主的な活動が一部では行われ、大人の関わりが子どもの水への関心や親しみ感を育てていた。
3. 清水を守ることが自分たちの健康を守り次世代の担い手である子どもの環境を守ることになることを住民が意識すると、清水に対する関心が高まる可能性がある。
4. 清水の観光利用に際しては六郷地区の多様な清水の形態に応じた対応が必要である。

文 献

- 1) 松永慶子, 朴 範鎮, 宮崎良文: 病院屋上森林が医療従事者に及ぼす主観的リラックス効果. 日温気物医誌, 74(3): 186-199, 2011
- 2) 中村真也, 原田奈美, 宜保清一: 住民の意識・行動に基づく水辺空間としての湧水評価. 琉球大学農学部学術報告, 47: 83-96, 2000
- 3) 島野安雄, 肥田 登: 六郷扇状地における地下水の水質特性. 秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学, 61: 1-11, 2006
- 4) Immy Holloway & Stephanie Wheeler 著 野口美和子訳: ナースのための質的研究法入門. 医学書院, 東京, 2000pp151-153
- 5) 高橋恵一, 久米 裕, 石川隆志, 湯浅孝男: 湧水散策の生理・心理的效果 生理指標と主観的指標を用いて. 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要, 21(1): 37-46, 2013
- 6) 近藤照彦, 武田敦史, 小林 巧, 矢田貝光克: 森林浴が生体に及ぼす生理学的効果の研究. 日温気物医誌, 74(3): 169-177, 2011
- 7) 小池 聡: 農村における子どもの遊びと「地域体験学習」に関する調査報告. 農村計画学会誌, 15(1): 21-28, 1996
- 8) 長谷川勝俊: 遊泳と水上安全に関する研究. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 12: 63-73, 2004
- 9) 角道弘文: 水路における子どもの水遊びの多様性と安全性について. 農村計画学会誌, 20(2), 103-111, 2001
- 10) 高嶋めぐみ: 横手市平鹿町年子狐・上藤根・清水川端地区湧水群における湧水環境および住民の湧水に対する意識の変化. 秋大地理, 55, 37-42, 2008

Attitude survey about springs of residents in
Misato town in Akita prefecture
Using focus group interview

Takao YUASA Keiichi TAKAHASHI Yu KUME
Takashi ISHIKAWA

Akita University Graduate School of Health Sciences

The purpose of this study was to investigate the attitude towards springs and future use of springs. The subjects were 9 male and 11 female (age 43.6 ± 9.4) people living or working in Misato town. 12 were company employees, 7 were public employees and 1 was a part-time worker. They were divided into 3 groups, and attended focus group interviews. This study suggested that patterns of use of springs were changing due to electricity and plumbing and residents' consciousness of springs was decreasing. However some residents voluntarily take part in clean-up activities and safety education of play in water. To make use of springs for sightseeing tourism, it is important to take into account the different variations in springs in the Misato area.